

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18520136
 研究課題名（和文） 水戸藩と柳河藩を中心とした近世前期における知識人の交流と出版文化の研究
 研究課題名（英文） A Study of an interchange among intellectuals and publication in 17th century
 研究代表者
 倉員 正江（長谷川 正江）
 日本大学・生物資源科学部・教授
 研究者番号：70307817

研究分野：人文学
 科研費の分科・細目：文学・日本文学
 キーワード：近世文学・出版文化

1. 研究計画の概要

近世前期（～享保期末〈1735〉）における書籍出版を中心とした知識人同士の交流の具体的な状況を明らかにすることを目的にしている。特に水戸藩と柳河藩等九州の諸藩を主な研究対象としている。

2. 研究の進捗状況

京都大学文学部・茨城県立博物館所蔵『大日本史編纂記録（原題「往復書案」）』現存本の複写物を入手し、これを中心に柳川古文書館所蔵安東家文書等を主たる資料として、各地に訪書を重ねて下記の伝存諸本の調査をすることにより、彰考館や柳河藩による編纂物の企画・編集・板木の修訂状況・出版・販売等の実態を明らかにしてきた。従来近世前期の出版研究は古活字本の書誌学的分類等の形態的な部分にとどまり、編纂・出版の具体相を追究したものは少なかった。

具体的には明の遺臣で日本に亡命して水戸藩に抱えられた朱舜水の遺稿集『舜水先生文集』『舜水朱氏談綺』の編纂過程を追うことで水戸藩と柳河藩の密接な関係が発掘された。

水戸藩主光圀が庶民向け医療知識の普及を目指した『救民妙薬』、大部の軍書『参考太平記』、これらは普遍性のある書ゆえ需要はあったが、一方で重版・類版といった今日の著作権に関わる問題を引き起こしたことが分かった。水戸藩が茨城多左衛門ら民間出版業者に販売を受託させる方式についても、かなり具体的に分かってきた。

また柳河藩のクレームから筆禍等を招き、享保七年の「出版条目」発布に至る出版統制を誘発する端緒となったと見られる軍書『九

州記』、また筆禍はなかったが各藩の不興を買った『本朝武家高名記』等について検討し、各藩のルーツや戦乱時の記述の信憑性・公平性といった問題が付きまとう軍書は、今日の人権保護や情報公開と近似したトラブルを巻き起こしていたことも理解された。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

前回取得科研費による研究の発展的テーマということもあって、蓄積を生かして毎年論文を続けて発表し得ており、新知見に富むと自負する。

4. 今後の研究の推進方策

柳川古文書館に残る史料を基に、立花宗茂が活躍した秀吉の朝鮮出兵一文禄・慶長の役一を扱った朝鮮軍記系諸作を検討中である。写本の推敲過程から出版に至るまで、戦争の記述が増幅する様相が看取される。

また柳河藩の宗茂関係感状の出版と信憑性について調査中である。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

①倉員正江、性天禅旭と平間長雅・八代城主松井家との関係覚書—熊本県立図書館蔵「泰勝寺縁起」の考察を中心に—、『人間科学研究』第6号、184p-198p、2009、有

②倉員正江、『書言字考節用集』巻十「数量門」と『本朝武家高名記』覚書—「里見家八

犬之士」「尼子家十勇十介」等武家名数を中心の一、『近世文芸研究と評論』第74号、34p-50p、2008、無

③倉員正江、軍書『九州記』絶版と江戸の出版規制—柳川古文書館所蔵安東家史料を中心の一、『人間科学研究』、第5号、380p-402p、2008、有

④倉員正江、『救民妙薬』刊行をめぐる諸問題—彰考館と書肆の関係から重板問題に及ぶ一、『人間科学研究』、第4号、228p-244p、2007、有

⑤倉員正江、『舜水先生文集』編纂とその周辺—『大日本史編纂記録』に見える中国人・唐通事のことなど一、『近世文芸研究と評論』第71号、28p-42p、2006、無

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕